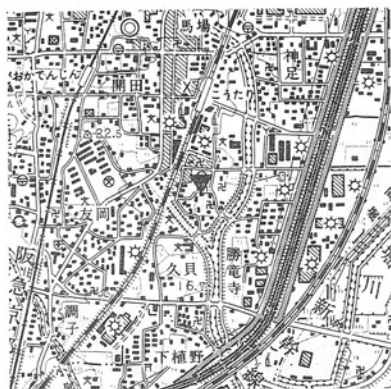




(京都西南部)

京都・勝龍寺城跡 しやうりゅうじやう

- 1 所在地 京都府長岡京市勝竜寺
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)五月～一九八九年(平1)三月
- 3 発掘機関 勅長岡京市埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 岩崎 誠・坂田孝彦
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 一三三九年～一五八二年頃
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

勝龍寺城は、山城三大河川の木津川・宇治川・桂川の合流点の北約二・五kmにある。立地は北からのびる段丘の先端部に位置し、標

高一三・五m前後を測る。当城の始まりは、南北朝期の暦応二年(一三三九)に細川頼春・師氏が築城したと伝えられる。また長祿元年(二四五七)以前に畠山義就が乙訓郡代役所として築城したとする説もあり、初現は明確でない。応仁の乱で

も度々文献に登場し、西軍畠山義就の支配下にあった。一六世紀中ごろには三好三人衆の一人岩成主税友道の居城となっていたが、永祿三年(一五六〇)に織田信長の支配下となり細川藤孝が城主となった。藤孝は元龜二年(一五七二)に勝龍寺城を再整備した。しかし天正九年(一五八一)に藤孝は宮津城に移り、翌年山崎の戦いで明智光秀軍の拠点として使われたが落城した。

今回の発掘調査は、勝龍寺城本丸・沼田丸の公園整備に伴い実施されたもので、細川藤孝再建時の土塁石垣や建物礎石、石組井戸、門、本丸や沼田丸を囲む堀、本丸内に築かれた堀やそれを渡るための橋脚などが検出された。出土遺物には、一六世紀後半の土師器、陶磁器、瓦、木器、漆器、金属器、墨書土器、瓦製土管や、石垣に組み込まれた石造物類などがある。

木簡の出土した遺構は、本丸内に掘られた四基の石組井戸の一つSE〇八である。この井戸からは、曲物底板や木片、土師器皿、国産陶器なども出土している。伴出した土器類から一六世紀後半の藤孝居城期に使用されていた井戸と考えられ、木簡も同時期のものと思われる。木簡は、ここに報告する一点だけであった。

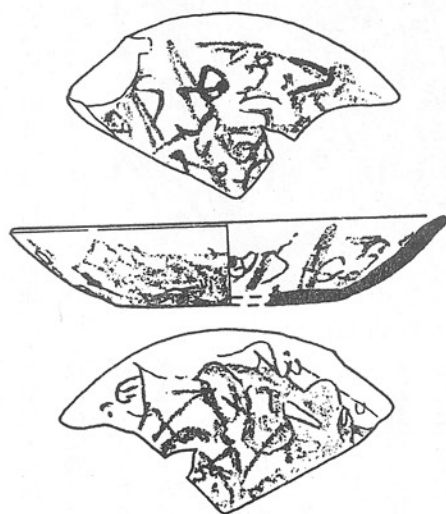
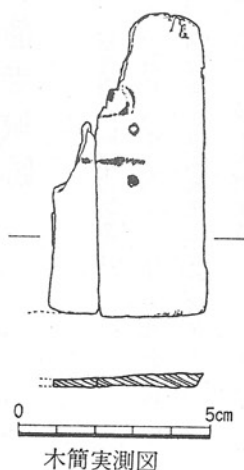
8 木簡の釈文・内容

(1)

□□

(81.5)×(41)×4 081

下端面と右側辺は切り技法により整形されている。左側辺と上部



墨書土器実測図

は欠損している。板材は厚さ二mmから四mmの板目材を用いている。その片面に、直線と円状の墨痕がみられるが、意味は不明である。本丸の一六世紀遺物包含層から出土した墨書土器にも、意味不明の記号を描いたものがある。この土器も木簡同様に、ある規則性をもって描かれているように見受けられる。従って、落書きというよりも、呪文かそれに類する呪術・祭祀に使用した際に描かれたものではないかと思われる。

9 関係文献

（勸）長岡京市埋蔵文化財センター「勝龍寺城発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』六一九九一年)

(岩崎 誠)